



あふれていた、おもてなしの心

このコーナーに登場してくれる人を募集します。
くわしくは広報課(☎20-15003)へ。



熊本国体開会式での地元婦人会による歓迎の踊り



小川 賢^{まさる}さん(花崎町)

明治大学～社会人時代、軟式庭球(ソフトテニス)千葉県代表選手として静岡(昭和32年)、富山(同33年)、熊本(同35年)、岡山(同37年)国体に出場。同競技県総監督を務めた昭和54年には、宮崎国体で種目別天皇杯を獲得した。「ソフトテニスは人生の縮図」と話す。「1試合25分の攻防の中に勝負所・忍耐、信頼・協働といったさまざまな要素が詰まっています」
現・千葉県ソフトテニス連盟参与、印旛郡市連盟会長

選手として、4度国体の舞台に立った。中でも強く心に刻まれているのは、社会人1年目、自身3度目の出場となった「熊本国体」だ。地元の人たちの歓迎ぶり、大会に対する町を挙げたの熱気に圧倒されたという。「国体列車に揺られ20時間。到着すると大勢の人が出迎えに来てくれていて驚かされました。宿や競技会場、町の至る所に「おもてなし」の気持ちがあふれていたことを覚えています」。

大学時代に2度出場した国体は、開会式にも参加できず「試合をしに行っただけ」。ほかの大会と日程がぶつかっていたため、競技会場に直行し試合が終わるととんぼ返りという味気ないものだった。それだけに、両陛下もご臨席した壮大な開会式、地域の人や全国から集まった人たちとの温かい交流、ご褒美としてセットされた観光旅行といった熊本で経験したすべてに「これぞ国体」との思いを強くしたという。

選手として一線を退いた後も、競技役員として全国の国体を見てきた。交通網や宿泊施設などの整備が進み、競



熊本国体一般男子代表は4人とも成田の選手だった(左から成毛静拾郎さん(故人)、矢島紀昭さん、小川賢さん、木内功さん)

技の運営環境は格段に整ったが、その分選手と地域とのつながりが希薄になった。選手・役員は勝敗重視に傾き、受け入れる側の関心も年々薄まっているように映る。そうした状況に、単に「時代の流れ」と割り切れないものを感じる。

「『駕籠^{かご}に乗る人、担ぐ人、そのまた草鞋^{わらじ}を作る人』—人それぞれの役割があり、それが総体となって物事は成り立っています。国体の原点はまさにそう。選手・役員・地域が一つになった素晴らしい大会にするために、成田として何ができるかですね」

50年前の自身の思い出に重ねて、今秋開幕する「ゆめ半島ちば国体」にその期待を寄せている。

編集後記

「新春を祝う会」に行ってきました。これは20年近く前に国際交流協会が始めた「春節を祝う会」が始まりで、現在は東アジアで旧正月を祝う国の人々が参加して開催されているものです。朝9時に会場をのぞいてみると、調理室でたくさんの国の人たちが、それぞれの国の正月料理を作っていました。もちろん、日本の正月料理には欠かせない「お雑煮」も。各国それぞれのお正月料理は、正午の開会後すぐに品切れ。300円でアジアの正月料理を味わえるこの「オイシイ」催しに、皆さんも来年は出掛けてみては？



成田市役所本庁舎(行政棟、議会棟、消防本部、成田消防署)はISO14001の認証登録を受けています。